

いつもありがとうお父さん

鈴木 愛渚

「また金曜日だね。お父さん、気をつけて。」

日曜日の夕方は私にとって、大好きなテレビを見る楽しい時間だったのに、この四月からは、さびしくて、大きらいな時間になった。父が転勤で、単身赴任することになり、日曜日の夕方には、勤務先にもどるのだ。家族で早目の夕食をとり、父を見送る時間になったのだ。

今まで、テレビを見て妹と笑いころげたり、父と散歩に出かけたりしていた楽しい時間だったのに、こんなにさびしく感じるとは思ってもいなかった。日曜日のお昼ごろになると、夕方父が出かけていく時間まで、あと何時間あるだろうか、時計を見て逆算してしまう自分がいることに最近気付いた。

何げなく過ごしていた時間は、実はとても幸せで、大切な時間なのだなと思った。

母は毎週末、父の好きな食べ物を準備して帰りを待つ。父が帰ってくる時は、食事のテーブルの上が、たくさんのごちそうがのって、にぎやかになる。「やっぱりお父さんが帰ってくる日はいいな」と心の中でいつも思う。

「ただいま。」
と父が帰ってくる、と

「おかえり!!」

と妹が飛びつく。私も負けずに飛びつく。クーラーボックスの中には、空っぽになった、お弁当箱と、少しのお菓子がいっぱい入っている。母が父の健康を考え、いつも小分けにした手料理を、クーラーボックスに入れて、一週間分を持っていって

らっているのだ。

父の好きなスパゲッティや焼きそば、解凍しても、おいしく食べられるカレーや煮物、おひたしに、おまけのおつまみ……。母は作りながら、とっても楽しそうだ。

「何か楽しそうだね。」
と聞くと、

「これをおいしいと食べてくれるお父さんの顔を思い浮かべたら、楽しくなっちゃうの。」

母は言った。人に喜んでもらえる事が嬉しいという母の気持ち、何が何となく分かった。

それから、私は少しずつ、父のお弁当作りを手伝うようになった。油がはねて、やけどをしそうになったり、なすを切っていてすべて指を切りそうになったり、少し大変だったけれど、何だか楽しかった。母と同じ気持ちになっていった。

「このハンバーグ、温めるとちょうどチーズがとけて、おいしいね。きつと喜ぶよ。」

とか、
「カレーの中に、オクラが入っていて、お父さんびっくりするだろうな。」

などと、父の喜ぶ顔、おどろく顔を想像しながら作るのがとても楽しくなった。

今週も金曜日に「おいしかったよ」の返事が返ってくるのを期待して、笑顔で見送ろう。

「お父さん、お仕事がんばってね。いつもありがとう。」